明星抄

未通女

玉盌（カツラ）初音

十

彰考館

乙女

巻名以詞并歌号之五節(セツ)はしるあらはす
号をとりてみそなり　源氏三十二乃四月より
世にの十月迄の事なり
をとりて　義雲(ヨシクモ)の
源雲并四月の義雲の源園(リヤウエン)三月迄也号今
ましてお新院　四月を義和(ノリカズ)清(キヨキ)といふ
桂齊院(エサガホノサイイン)也今をいはり升院といふ
なる猫の　齊院の行幸也又祭(マツリ)御
禊(ケイ)などをいふ也
大殿　オホトノ

みそぎの日は
ものいみなり　　かみ代は穢日也祭三日なり也
新院ありしとき　　ひとひさるまと也さて也
ものいみ　　ひとけぞりなる所なると也笑が
院ありなさせ給て除服のみそぎ所なりと
ものいみなり　　也笑と渕ふしもせてうけ物給
あまりなりみしうり
ふちもの　　笑の孫あり
ありの気なれい　　何なりと時節を感ある也
方衣　除服のみそぎ也月日也と移る也
明日香川渕ふもあること所のせんうり
はりとものうあるもひあり
たうなくと汁
にあうなぎされ　　ものいみなる事を用
はみなる河の　　月日を題也
服を湘して源うりはせる
院ものうるさ　　院いうるさ
はめつきなる也　　院い新院之院とだうりけ
食はも
ものいみ　　新院ふまもくはもうやうもるる
ものいみなれ　　ものいみをせんでのはる也
ものさんく　　新院のはものいみをせんでのはる
ものをとそんく　　笑也

こなすことを　ある家業なれば対面の時うく
撥刑（ケウケイ）に行はる　或て家の業（イ）とも斎院
ある今はめるる　にくまれすいはれることも云はざりしと
にくまれすいはれることも云はざりしと　源とうそ人ふこのうる
もちうとにあはるく　源とうそ人ふこのうる
とは指さ事に云はる也
こた家の姫君　蓉子
三女　蓉子の母女
屏風とそくえさこめ　蓉子
さうつるく　斎院御りあはて又源氏乃
のはまつたく行る

かつきなると　新流のはる
家人も　さうくんくこ
れはこうは　源
ものさうへ
大家たち兵部卿宮　是迄新流はるると云り
はくうんあり　光うう夕霧のはる
大家の　夕霧十二歳
のとれあく　夕霧御母
たうあり　三条の家
はは位よりてん　二条院改長也
　一世兵源氏は也は位は位ト
よ叙する也夕霧は二条の源氏なれいあ位よ叙

もゝさゝ人なれども多く世の笑もあるにより
てさゝめて位なき侍はさて世なの人
とそひるゝ
きゆうるゝん　不意にひやりもあるとも
あさきあく　六位の緑の袍と云り
あとこふうり侍を　夕多く童にて童殿
て昇殿（ショウデン）する所人それがやどてうりの
つを侍を云り
ゆえのめんありて
をいつゝまりより
二ツ（ノクイセ三上セ）　亟相（セウシヤウ）の子忠なのたよへ事京相（ヨシアイ）

俊賢（トシカタ）等此例あり
源氏の自称（ジセウ）也
源氏　迎花帝ようのひとりた
ふ也それさん及りさる事此多さも
ゝ人なきあやう
貴（ケン）をあ（グ）ふ
はうれたりうり也
たゝき家のおうて
世を此すとあげての侍
ゝなまの
やまのたなまぬ
さゝあうりて
なとある人を事と云り
日本の目あうなど云也
笛付さゝあうりて叙爵（ジヨシヤク）

仕ふすたりすん　源乃たく成ぢくのり
而道也
うちなきよ　大家也
けたるたとも　家ぢる也
ぢきるちみる　夕雾こ
た湯つ番　たるとゝ別服の乞事也
ぢとゝひろく　源こ
ものこと弱よ　夕雾此ものを云り
あきるぢる　字也儒者ふたるとて必ず
ふるる也文章院にて堂監と云りのゞ簡り
きつ〻ぢる文厨康秀を古今此序り文

様とうけるもあざる也けれ也安物よ安
見えこり
たるる而なく　源乃ぢるみりとて而を重て
たぐうぢるもなく　なく流りあれ法式の如く
ふ事を行ふづきゆを下知ゝ行也
家ぢりふふ　家ぢる儒者ともい皆儒
家ぢる也
すつて　家ぢりたる人をとり
屈りもとも　砂をとる
民ぢる　系畠ふるさ人こ
ぢりるく　けれい今ぢたるもこされと家

みてんつきみるる也
とめいてゝおろを　河海の孔さもこそとも
こえられど孔めるとゝ云る也ゆるるをて
驚るさ立る時下也
ありこいとあ所しやこ
おりとんの字こ書をれなりと早下
これこいとあ所しやこ坂下の人こ云也
大饗をとふ也　坂下の郷とてあるこ云よ
てもさこりこ所人数のみを云也ゆく孔下
の傳者ども中にだるるとの事ゆ孔人所
ゆるふるるゆとゆこ

けるゆ十ケ条の一つ也

ひさうふ行をこうふ　飛さみ行り孔也
うこりのをろとと　大字の高孔和こ所ゆう
みゝくゝ孔ふをもこゝ　ぞしていたやけよつうま
つせのふがすこ所ゆ　ゆころをなるゆをゆ也
ゆころひく　立人こゆて矣也
なりこゆ　孔信の高孔和こ人く矣孔て
庭をゆてこ孔づさとて　おどゝ所こ
みあをゆろとて　高孔也とてもこゆる也
あされこくなる　おどけみさけさこ
けうさしまてゆこれ　けさうする也和とつ
いせうする所孔出庭　孔孔孔孔孔孔孔孔孔孔孔孔

枕なりてさもあらんとてうれ居給へ
うりまつりは　源の仁恕の御さ云こうり
さいんへ　秀句を云也
みうさぎの衣　自身の未なれば也
九中弁　糸崎の御社人也文章生こう昇殿
桜の雪をうのヒ
おもしろの所也
女乃えもこ　源の仕弱を云り
ものうく　第子也
俗以上吾朱常無論焉　東俗の弛こ　論語述而ノ自行束

ものひはうくみて　第子也
大きなる人こう
こうは月の月　夕雨こ
今ハ是こうけさせん　大学寮にての試也
学寮にて史記を繰しめて義を問く傳士
を試る也あく袴ばかりみしこう
先はおりて　源のはるみく内し試弱こ
九大弁　八下は三人系圖りみしさる也
つまこうり　弱くあれば只こうまこうるおみいる
しもとくまの事のあるをつゝ出ずと云ばへし
さうこさみ　ひとへ大学のたよへ弱よつさ器こ

とんとゝ立所也

親の立うり出れば　生死の瘧の字也　寿夭

巻うり出所也

大和さうつさけ　けれ所ふ壺とさう

世のひろはて　世ろ人うちもむらずもゝ

しき人也

寮試の前日也

大学ふまのり弱

大学寮乃門

出うりんよ

大され云

文章也

産の事を

学ばれ長幼序序と云へ今の文

ありつの立所

制止ヲ加ル也

大学ものさうゆる

源氏ふの勝学院橋氏ふい学館院と立て何れ

ふくも学問をさせ作るべきこゝゝさり

文人ゝ

進士及第也　花ゝるふあ立所

さる大数をあげていゝ二也　分畧の宣旨也

うゝふる人の中れ文章の生ゝを主として国ゝ

より進をるを擬文章生と云也文人ゝぎさ

うゝとけるも也ゝ学い擬文章也ゝ学ばれ華

のけはあれ試あるゝ也

うゝてさけよ

立后の事あり

ゝて文　落雷也　雨雲也　雨雲ゝすとあるゝ

みとれかりめ　光る也　河内花園に歩みしより
源氏の打ちきり　桜ちる也桃園（モゝゾノ）或人夢見して
世をうつす　はなの顔（カホ）うつふ俗て仏ゝ行ちる人ゝ
はな毋方りて　舞雲と或人云ふ也かの女（メヤメ）の女房
と出ゝきる也
梅はなか　秋はぎ
はさいたる　古毋は是所の事也ゝ
しを引ゝさいたの人ちる也
はゝ大殿蔵ふあり
人ゝいとすくるに　勅例物ふ人ゝ
けふ下ちるのもとより

めんちる　梅ちる
毋屋けるとに　有歳の方也
とゝすさゝ　源ゝもとゝさ所ゝ
今一ふ　ゝ井屋也
もんとより　ゝ井屋の毋ゝ主源也今ハ梅
家大納云の宮より　御のつる也
そ迎ふまゝせて　はのおもやよ　まゝよそゝん
ゝとりまゝせてゝ　ゝて左と異事ある也
女房ゝ　弘徽殿ゝ
はのこゝふうちとくまゝき　夕雪十二歳雲
井屋ハ十ゝ歳也

ふたりてハ　　是四とて者〻すなわちと云り
おくのこいとゝ　　大臣并内大臣の大饗
ゑんうろの　　大こゝ也
ひとこゝ　　内大臣の和
何れみこ　　なみこれとゝもとりぞへあげ行
ゐなよおくゝの山雲とり　　四こゝ也
和のこゝ也なゝ
　　おゝたのはゝうりつゝ
　　なるゐおりあり事也
ひろうあゝゝ　　合饗とせでゝゝ
ちうさすゝ　　たまゝゝすゝ
さゝひよおゝゝ　　大ゝ和四こゝ

ひゝなる何いつう　　ゆゝ類をみ行
所へすゐれよゆゝれ　　内大臣乃和
ゐゝゝゝゝ
ゐ所を　　弘徽殿〻
ゐりゝゝ　　秋ゐをきれゝゝ也　藤壺との行ゝ
これゝゝ　　ゐゝ
ゐゝゐのはゝ服
　　ゐゝゝ也
さゝゝひゝれゝゝのきゝれ　　四こ中宮とゝり
おゝゝ行ゝと　　大ゐの和也　忠仲公の妻　茨原
ゐいさゝすぢをれいさゝゝうゝこゝて出

もてはやさるゝものとせ

これかれとなく　ゆかりかれゐの中也

姉兄の花さ海　至ゝ序也

きさひくあり　いとけなき時也

まちの名へ乃　秋よめてわよあひゝる綢繆之

風のちらしをうつしすくなし　豪士賦序の趣

私案之豪士賦ハ齊王冏と云人功ありおごりたかぶるをそしり作る賦也。文選四十六ニみへ序ニてかゝりを載たり。此序ニ不足繁哀響也といひつたへり。是故苟時啓於天理盡於民。庸夫可以濟聖賢之功。斗筲可以定烈士之業。

言過斯也。故曰才不半古而功已倍之。蓋得之於時勢云云。此心ハ庸夫とていやしき者も賢聖の名あり。又斗筲のすくなきなる者も烈士の名あり。又古の人を及ばざる人も功名のすぐれたるは人のあるゝ也。それは時代運なると云る也。只今内大臣の心も今時の勢ありて天下を仰し給ふと也。此ゆへに吾むかしの人の立る言にたがひ今時ニいたる迄くは中々此言る事を編し給へるも、只今也と云心なれば世に申合てしたがふ味あるべきされ

いとゝそんとゝもや　感を加ふる也
あさく　さいめん　内大臣の詞
さゝの紅葉　大宮殿おまりの御さうもうのとき
ようし　かとろ〳〵かす　うろ〳〵さはる
みんあ〳〵て　檜扇（アフギ）　うちはらるゝ人〳〵
萩の花もり　もゝの袖も濡れ
大宮殿　花鳥　大宮殿　ゝゝ　紅葉の下
のうなる人〳〵　紅葉の姫君
いとおもしろき事　内大臣也
おもし〳〵　内大臣の詞
あれうの人　内大臣の詞

あれさるすゝて　はとゝきすおうぐひす
の出来めつらさとも　内大臣也
されつよひ　内大臣の詞
ゝとせて　内大臣
ゝ　内大臣殿　内大臣殿のゝ
ゝ　内大臣の詞
おもし〳〵の　内大臣殿のゝ　姫君
必立后　内大臣殿のゝ　姫君
大宮殿　大宮殿
おもし〳〵　大宮殿
也　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ
ゝ　ゝ

大夫とうろこひらめ　内大臣の詞也
あふさみ〜ぬを　姫君は大夫みるそむく〜
よう〜ぬりみて
うすの出来めうと也
いうなる事みて　大夫の詞也
こののきはけ　内大臣の詞
おさなおりのを　姫君を祝けをうす
あはれさ　てを下ゑ物のうゑ織也源氏年々事
をかして云り
なふりれ紅みもあるを　為中みて物ぶ
とをなさぶ雪とを弁ゐといてこうるを云り

ゆりむつの　物けなさ中也
爰みをとり紅ゐ　大夫也
くらあきすい　ふてそのみづきれと也
みをうしう　此姫君をまう紅ひは
うりをつ〜る也
むすきをみく　紅なさ事みど紅
人のいるやと也
何れうれう事みる　内大臣紅
ゐさ人といのあ〜　内大臣の詞
くりなきみとれいるさむすあ　碧湖天
皇康子内親王のゆ何はみそう

きしきかたちつくるる　媒なとのあるとく
ゆるいきの事也　内大臣乃羽
ふ事をとりて　乳母達をとりてのかたち
そこなちい　按察大納言也雪舟の方
大納言殿より
はすく又也
男達の　夕雲をとれ大切りこひの事
ちりいりこひつきかの　内大臣いけ姫君
をとひ拾て垂れひをとうくゆ事
ふて待ぬをとあるを也
けをりあり

のあをと雅人をとむてきそを也
おくをとうめうり　内大臣けうあくこの事
はこ共物を　大夫共はこの内内大臣乃人也
きりてをと草子を絵を書也
ぜひをとす
はをとにより
ちりかをる
何ものの
う今をを
なるさうし
を平房也

大夫共羽
夕雲の心
夕雲乃羽
大夫共羽
中陣を也
是ちりをとなれり

あかさ雲井此寺も昔ごや嵯峨寺嵐の出かゝん
こゝろ　雲井寺のめぐみとこそ也
ひとりては　雲井寺の事也
気ハ去てらぬ　菓子捨也
さ秋中に　名月の前也ゝて出しさる也
月のとこゝを見る　吹きれハ月りも去みある
秋風を色なし抛と云ひしさ所萩の上風月
りとこゝろを見る所と手つけ寺所椿艶（エン）り
折りそ
又くさりて入きみりとと　くらぶてら所つき
手とこと云ひ捨ハさる也

折くへ中まで　同古き也母ハ帰り捨けざる也
雲井寺をまがれ方ふ淡し者らんとて
水の方りハ　雲井の寺乃継（ケイ）母（バ）也
くる大さとてむつゝき　弘徽殿の立后な
きぬ今なく云ひのの表黒り出者らんて経
雲井の寺をも黒ふ垂有るてさといのあり也
さすらにらんは流と　立后こそなきれどもれ羅（ニラ）
妃ハとうざれハ此上寺（文ツボネ）りゆとのくさり
捨てらとをしてえをありゝまず也
みえうなまてさせ　雲井寺を残さんとて出女
沛を淘し者り捨也

きつかう
つまてみあるされん　内方の和
さくしゐ　はるくさ〳〵ゆきかの地父秀を
きり紙〳〵毎益元朱義日は限いたるよりゆきに
ねびんどものゆみてのめるとられ
文いてあへなくと　大ゆめ地
ひとりねせまゆめこと　蓑ゆこ
おかこまりて　内方のゆきの
ふあるなさ　一宿をとりもどひのみに
ゆぐてありてあぐなひをつるとを和を
うけてゆれてぐてなれかうふふとと

とくとゆ地朱義云とだりと須〳〵陽也
なきればそ一気浮処をびゆられと
源くなそて　源くとひるみくるみくる地
内うさみてゆう　如清墨出のるゆ地
あるはゆ　暫時とひてあつけゆくふを
成人せられるはゆ源くあと
えてみんとなさせ
をせ井方をとかるる
うるあ和　大ゆめ和
ゆさ形ゆふとと　久秀を井方
さとうはのあ　新ゆけゆとても新ゆ
きとゆはひかくはの地のひ屋うを源さとの

とのしふかうすハ我身ひとり此あやまちにのこ
とひ給ふやうをうらみ給也
此注ハ志けり　一月ニ二日ハかり太政大臣ニ参り
給ふとあるもしにおもへかく志けき也
たかおや納言　昔太政大臣の御孫也
左衛門督権中納言　内大臣此兄弟之別腹之
此氏より　夕霧也
太政大臣此條なしと　夕霧一人をうつくしみ給也
此姫君　夕霧よつきそへハ雲井雁を大切り
とひ給也手あかし給ふ也
うくて後り　母君引別屋給ふにつきる也

と此ハ今の様よ　内大臣家内ありて夕つらされ
運をなりんと也ぴうるに用さなとあるなき也之
いふつひなき事を　内大臣此御中ありて夕霧
ふゆうてもあるなさかしハおはせどみそ給ひ播之
給さし此深き　夕霧の志を試(コヽロム)つなき也
気色よもおはらち　弟子也
家此條文ふく　内大臣なる君と給ふ者也
よりて文を書う給ふ也
こあらしく　おもくとしころ也巨の字也
いそむつきるれ　大政大臣也
いそや拍けるすると　字よの御之夕霧をお

みづりゐるなり也

はるゝ　はるゝ所あり也めのと也和名

きたはるゝ所なり　なかさり也はなり也

はるゝさはるゝ　夕雪の和名たれのゆき

はるゝ也の　夕雪はたれのゆき

さられ　さられ也又さはれと猿人也あり

まろを　をゝ井屋和也

とれまして　内ゝより退出ある也

そゝやなと

さをさられて

はめれと　をゝ井屋のあれと

夕雪はふるゆきなり

交和名抄云　交ゝ和名抄云あり也

そゝぶと云也

れさ　れさ和名

夕雪の和名をゝ井屋にそゝけの也

れなゆれ　夕雪の字

色ゝり　ゝさまゝゝ人のりてゆゝなる

ゆゝしき色ゝり　染也ゝ衣ゝと也

出ゝこゝり　第乳面白ゝ云白孫也

大反ゝ　ゝ反せゝち　源のまゝゝせゝ

女節惟光ゝ女まゝる也

行ゝりの　させる孫也ゝ

のゝゝ　花ちる雲也

色ふかき　さくら　藤原の孫閑也　今を盛
色あるたまりそへきてとつてくる
たゆつ　蓑　二の兄也　兄なり也
うのあせち　ろくに二人　兄弟二人也　兄分
ハとり出さるく也　さそう人のといひ
交ぜて人をそへて　兼姫をそ　尋ぬ所なる
善相　氏　意　ふみ　しり　河海　よみ　えり
あそんのつぼむをあ　惟光　氏　女　まし
せんまいりとゆひ　ひ　侍　察　大納言　亦
だし　氏　実　を　者　り　所　れ　り　実　氏　む　す　あ
を　者　る　り

まひ　な　り　を　孝　て　墨　み　さ　く　ぬ　は
せ　り　義
今一ぬ乃道う　　残る人のあまるあれ
そ今一ぬをもまりせ　きと也
大う氏宗　夕　多也
うのれる　ぬ　人のれ方也
まはるひ　結毋　あそひをさけ也
なやまりて　惟光の女
氏人　氏　戸　り　ぬ　う
ふ　ま　な　ま　み　る　る也
あり海を　て　照　大弟　氏　人　也　と　天　人

舞姫を云説々あるをとらへそへたる也
三川垣のと　名高き世より此云はあまりに
うちつけすると草子地の書也
あまもつしき　此女のさま
舞さうしをみとて　けしからぬと志そふる也
五節に立つけて　五節の日ならびに衣を着する
也。余勘宇治左府記ニ仁平元年十一月十七日
癸ノ丑晴。今夕五節参内。師ノ長未ダ蒙ルヲ聴ニ直衣ヲ
之宣旨ヲ。上日東帯ニテ参入。似タリ無ニ面目ニ。仍テ不ニ参内一云云。案ズルニ
定之五節ノ次ツイデニ上古ハ直衣ヲ聴ルカ。夕霧も此ゆゑ也
衣を強とふんそり

あしう
物さまけ　巨々也
まひの舞姫　草子地之何事も志てそ妙なる也
立けなる也　上古八十二三也。今の世は五年も
昔は月ごとに　つりて此五節のことに
し女子と　ほくて此五節のめくつりしまふ
也。昔男と云のかうめる後也
年月乃つもり　名高くと絶て無く此弱ある
とあまれなる也
うまでいへど　そのみ添ひ逢まつりし
を語るらしとあらん世なる也

あをすりのみ　辰(タツ)の日にあをき色をきる
おりものにあひにする之
こすみうちそへて
きのふしう
つゝきんの
あかみれうきされ　雲井雁之
又云は御髪(カミ)ふとく被(カブ)をを
をのこ之おこに国のものにまかせてかけり好也
たゝの君　実子にはあらさる之
それもとゝめさせ　又云は人にあらさる之
そのくは　夕霧也
おもそへて　雲井雁は手ほんにおもそへて之

せうとの　此葵姫の兄弟也
ましう　溺(ナヅ)也
いうそう　在名之
されども　ふやうの事は又もいましめ
りのたとへにいへる也
緑(ミドリ)のうすやう　六位の衣をいふまり
月のさまにも　君ひらけしるき云
ふさりうる跡　兄弟也
ちくめし　惟光也　又云也
あこりなく打出て　惟光よりいひける之
こきんちくん　汝等(ラ)之

度のはなをうちて
をちかたの
みないうれうち
ゑれへハみをうに
ぶりぶりぶ　朱　義曰五節への事也
墨さへうく　をせ井戸の事をいひ出ぶりつま
とうるれふをうれ家も知うくいりうく也
とれいひ西のうるは　夕雾を也義墨よあつけ
ぶりるすれ也ぬくるれ　ぶりて也
うてのぶりふまうに　源のぶりふまうけ也
ゆれうふを　夕雾ハ也義墨をかの人ぶり也

源氏のはなをうち也但夕雾
ゆうれいへうも皆立ぶり
をせ井戸へうをぶりより
五節への事也

夕雾ハ也義墨
九條の屋ぶをうり言ハ
ぶりてうる事にうりぶりうすれるれいへ
ぶめうくくぬをうる也
大宮ハ　いまさ所のきようにまいりました
ぶうて　夕雾の独毎ぶ
ぶいひと　夕雾乃頭ハ
男いうちぬき　宮ハ羽
なふへ　夕雾の羽
こぬく　装ハれ文

みむうひてうるうひるうん
のぶりをうひぶりる
うまゆうれの
陪りてうる事にうり
ぶめうくくぬをうる也
大宮ハ　いまさ所のきようにまいりました
ぶうて　夕雾の独毎ぶ
ぶいひと　夕雾乃頭ハ
男いうちぬき　宮ハ羽
なふへ　夕雾の羽
こぬく　装ハれ文

袖ぞそでぬ　源ハ此ほとの方にハいつもますま
すれて月ものつらきを堂くなりけると也
まくしう　あとく志うこ
きさいの宮方　花安の曽也
おや今一所　蓼上也
つひふちふも　源三十三歳也、太政大臣ふくハ
節会(セチヱ)なとふもあるかぎりよ出仕せさせ玉ふ、但
中古以来ハ節会に参する事あり玉
よしふさ此あらく　忠仁公也　准(ジユ)三后(ゴウ)ハ忠仁公
もどめ也　白馬(アフムマ)をと云節会のま当也
朱雀院より　仙洞(センドウ)への行幸ハ毎度朝覲(テウキン)の

行幸とてあるハ父子の御対面する也、是ハ正月なれ
ましまさねバりいくと也、但賢木巻に志家を
見て今乃御子になして　などの給ひ也　こまごとけ
冷泉院君臣ハ朱雀院乃御猶子(ユウシ)とみえさ
冷泉と云しさぬらで仙洞へ行幸の事ハ中
古よりハ頻(ヒン)しの事なるとや
古家　孝なる也
忌月(キヅキ)　音よみすべし
あを色　麹塵(キクヂン)也
あをしあらいろ　ゑう此ちれの日ハ当一尺[illegible]
[illegible]主上(シユシヤウ)とて同じ色を着る所也

院も　朱雀院也

きゝとれる人　きゝ〜所也とゝのさま

うくは　学問と今日及第をぐきんとゝ

勅勘を　勅勘をもうる也

夕雲と

大臣のたゝ云

知〜うるさ　臥病とゝ

つゝあ新り　敦島乃仏文て中将の人も好

とあ所ゆりて　時を仏〜する也を気いりた人

接合をとさせ　仏用也　唐部よと　進士を試る

おい人もうゝあ　ふよとこあて垂くゝとゝ也仏ゝ

くゝゝゝき　楽をどゝゝてゝ也びあ

つゝ和をゝ知すす也

院のみとみさりり代ゝ　新るけ院の帝を

相撲と云ゝ所　絵所朱雀院ゝてあゝ昔

仏花の宴乃時を　出ゝる也

誉の　今日の表誉る殿いゝゝれたむつれ

もとは相撲乃れ門のゝりゝをゝり

九をを　相中とゝゝ仏ゝ所也今日仏絵筆

ゝて芸ゝ　芸ゝ芸ゝ也

帥のゝこ　蛍ゝ芸ゝ也

いゝ〜を　唐楽ゝゝの狂楽を仏〜ゝゝとれ

代を移　内ふあるを楽ていひ所よあゝん

ゑ[ヱ]と礼[レイ]といつて礼記[ライキ]にいふ
あるなり　　孔子云[ヒ]たるに依て
学[ガク]也　　礼[レイ]制[セイ]也孔子の何[ナニ]も昔に及ざるは
と早[ハヤ]りものゝ朱[シユ]改[カイ]のとぐあれと早[ハヤ]
これ[ハ]はさてこの
物[モノ]はさきの家
くなくゝ物[モノ]まいける　　朱[シユ]雅[ガ]流の無[ム]
ありてもなぐ[ナ]ひ[ヒ]ものゝ[ノ]ひ[ヒ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]
り[リ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]
今[イマ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]
さ[サ]れ[レ]ける[ケル]　　后乃[ノ]
相[ソウ]国[コク]寺[ジ]将[ショウ]軍[グン]義[ギ]満[マン]

朱[シユ]
ひ[ヒ]ば[バ]勅[チヨク]定[テイ]
物[モノ]くゝ[ク]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]に　　学[ガク]問[モン]ハ[ハ]ないでもなし
ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]
今[イマ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]　　是[コレ]ハ[ハ]ものゝ[ノ]
ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]　　貴[キ]族[ゾク]爵[シヤク]也
ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]　　老[ロウ]ひ[ヒ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]
ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]　　接[セツ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]進
進[シン]士[シ]なり[リ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]
さて[テ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]代[ダイ]の儒者の家[ケ]人[ニン]なれは
秀才[シユウサイ]と云[イフ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]人[ニン]を秀才
家[カ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]貢[コウ]進[シン]士[シ]ハ[ハ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]今[コン]
雪[セツ]と接[セツ]入[ニユウ]也[ヤ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]ものゝ[ノ]進[シン]士[シ]の家[カ]の礼[レイ]記[キ]

の王制より出て進て爵禄をうくべき士とそ
三人　夕雨は中也　雨弁唐のうた也
和こと　内方こ
中宮の方さ宮　はるは春の花四絵也
或人々宮　はること花のよ宮こ
宮々うてい　保世宮歳也
はとうみのう　はる宮也宮満也三代実録出
世元年三月九月方月丁巳太こ二て宮延喜
碩学高倍五十人お清和院大殿新會海法
華経三部三日読太宮大后今年始廻五十之算

出慶賀修若彩餘齢歌を万々文学百
官畢会
うていうる也　はるこ也
えんうの流ふを
きこれうり　花咲宮はるこ花はるよ
おとこふれく
めはるのりあそぶふ或々宮とまてよろ
ひろれく狂ろ事所せずの花こ
女帝乃はまらひ　王女は立后ある万さとさ
をなる事を云なり
東院はすみ給ふ　もと宮也

座りある花はまろくさ　牡丹の勢ひとよし

いぶり

五月(サツキ)

ひめ　じやうめとよむべし　鞍上の馬也

家ハ出居ありてそよく　舞り後あり西日し

ひかんの　時じ参れはよむ日ふのあり

法華十人　紫しのかつらひ也

旦佳の佳うち　六佳ハそくるきさ也

今ひとかさ　花ある星也おゐり花ある星ぞうる花

秋きのくらうひ給ふとおも

仏法乃かふ　夕霧也花霧星に佐(グブ)ありまで

こまけ　こまけ也　五六筋(ゴロクスヂ)

さんいてと　紫上のとらひさくさりふ

是ハ花一路とみえる也

あきさふ　紫上花の方也

又ら花ありきさ也　花なるよき流のは

事をひきり

さみうひなれ道は　遠花す紀ぐくの

さみう梅也

ひから　みうう萩花よりちるふとも紀

紫花西日さ縁も清境せずよ也

風より散れ　紅葉ハ花よりいつゝえいそねの

松の葉にたりさこそ海さへとあふぎぬる海
をやうにの給へどもたゞ早下ぎすての給ふ
はせんなるべく　中宮はおなじ
葉に花盛な　これ胡蝶巻の序ゆゑ出をこ
いとゝさやうなる　給をうべは四町八町乃
中おとくゝ云うて給ふる海見すると
大井に出方へ　明石ことを

玉鬘

巻名歌をよて号之源氏三十五才に三月より十
二月迄の事にてり
五月つゝもぬれと　は巻実清むなの乃作ゆ
けりされをもたゝ方に久きるもあるこ
は数(カツタン)積事痛巻をり給ふにかすちぬ若
こゆて面白ゆ巻に光事痛の巻に色陸家の
事をやてり久ゝ月のこゆ加ゆこひる人なゝ
とこのく弱ちりこ所ありは巻に色今は
方東院を造畢(サウヒツ)あるにてさこれ院の内ゆ
兵乃丘世ゆゝば一方ふゝげ作ゆ（きゆをこ

ひとりあるまゝにて深くこゝろ出せるなり
はるゝ人数増新つきかゝるよりひとすぢ
物のはるゝ及びさるなり
たとへ何代人数のゝねと　夕長の代後ひとへ元なる
次ぎのはるゝ　はるゝ所の方より海まで
代西乃京にとまり　ひとつとむ驚の事とはるゝ
わるゝ所なり　いめ代所のゝなるいさや川
いさとさとへて吾名りすみ夕長のこれいそて
ひとく城ゝるぞとんに回べきとつゝはるゝ
とれ名を神分につるぞずして重なるゝなるなる
迎とんに代あ京のなるゝ人ゝ考なるもせぞてある

かゝりむゝるの行事とまゝさゝなる
長はめとと　夕長代との乳母
又なゝ　教仕のなゝ中なの河也
まゝるゝ　よ長年のゝ人生ゝなるすゝきゝ
知なるゝ　くと第四ゝて知なるぞゝはゝ中
くゝ下圓のゝはゆゝるゝなるゝ
ひゝるゝなりせゝ　夕長のこれ年代ひむゝる
なりせます　はは并あ育の歌乃仏名河流花
名あ物長院不自也　河流て流ゝ長れいあ
せまゝぞゝるゝ夕長との生也てありこと
書はまよなれはまのぞるにも必相具す

きてすぐしたまへる御ものあはれなるに
ぶきよりの歌絵ども
撰八代集おやはしあるべしとてとりいれ
つりきり　人のむすめ八かりる　弁宰相
きこえ給ふにもなりぬ日をまちかねたるいとしるしとて
うちうめくも　内侍のすけ及
ゆうさむひて　あふさかせり
あ人も　系図ようのものをあ人に何の
ひのかれそこ　あれりのを
さ一方に　えやそこ夕島こそ
ねのみさえ　わまに立れそこ八数を立まさ海こ

ちりやうねんをこれを見れば昔の人はさこそすめ弁
こふいりつそて　鏡なる也
義なるに　夕島のこそ
ゆうれあくもや　必義ものあるもまれ
やうるる見れば　おまはしけどこれるこをありきこ
お武にんそて　お武こ海こ
こそりいよりひきき　ものをあるまれ
こゆたひて　弁御（ウヨ）ものるこ
ひけそれとをこり　お武八任（ニンジ）五ケ条なれそ
お千りなる人へ
とのこ三人へ　お武のよたこ一人に出家介也其

あい二郎三郎と
吉分のきうとい　臣うの名代志ありがて
芸人代はるい　むううの寅年の家籠の中
みヒあうるて沿と
てついて　実他作て也
いとたうき彩を　幕末書になぞ〜これ方のうも
むすあとう　皆よすが定てありつきうも也
ん代内ふう　うくありつきめれいものづう数へ
のがる事ハ何とうして打立作也
相ゆ引きる　むううと
ねさう　文星と文年三云文九月けえ云云

接世代ふとあるとうと
ひせんの国とそ　任果て投服の国よ任ぞうう
大まの吟ん　監ハ大寧の左監と相前六位也
さうひの中監うて　叙爵（ジヤク）きうが叙留して
ある大まの監と云と
あるの公　何ものを合て国公合分出て
ふうりい　二郎三郎と
とのく吉分の　けニ人がと
世うきまふい
けんの　大まの監と
たうとのと　兄弟の内みく弟一のうんと

こゝろく　　老い初めてげうるすと
あけてそまろん　　上屋とそう
それハ初めえうるとと　　大夫監こ
ことはういとたこうきる　　孝經序吾嫂其説
迂然無以難之手跡ハ大方ろうき拙和のす
色くとものきこそでこそそ拙云なれと侍ると
同朱似けるにハ和ごうこげりもろく説ん
重言此美也如西方
おさうんそ　　大夫監ろ和也
ふひとと
秋なねとも　　三百なれハ也引ものやうり

きりけをとまり
爺やふりとそ　　大夫監ろ云を爺ごとそこ
和こ和　　故お武の妙家こむうろと孫と云
なのこれい孤毎といふこ
こお武　　大夫監ご和こ
いうにつふまるて
和こを　　和ごこ　　威イクウ完也
たふこう　　女房とも多を色きこうめすれ
いこをおりめすこ
すやけこう　　しやけごこと云和こ
ひこなみ　　日輩ハイ輩ふすまごきこ

きさらぎの後よ　四月廿五日とかの暮とすぐきこ
いくらくの時をあびれたくの和こ
ものひはうとと　かくなるよりをいとり
さくにみ物　　女監う和こ
天下(テンカ)ふ　　ことと音よわざと猿こ奥りけ和歌
こといとり四月　　月づいたるへ
きれて　　三月いまのことけ月こか祝なれ
事なれと面白をこのゞ迷ん事あ也
物りていく　　女監ふ事こ
気ふり
うり廣徳(ツギ)いけ蓋(リキ)八不の一所也鏡弥(キキケ)ふ式(ヒ)の

元祖也奥りあるへ弥功皇后ばこかふ
気ふりもとおりて義新千載(ザイ)ふ二あさらこ
ふもめる男の服ふ四(まりて作りきるだ
りにつけて文をとをて作るあるよけふ式ア
逢ふんとふ二ふまつるる猿け弥やうをて出るん
これわい　　作なと自称也
あれふもあるね　　我もあびあされるけ
うりとるきふ　　ひよとふ作とありけ作よいり
をとへて　　月りて義華をとふりとるこけ
大夫盗ふとれるゞ弥とつ〜とふへきてこ監う見
たんわとをとをて作るきる作ふよあるとうきり

いそやこいうか　置きてとどめる所を朱多分此む
まそやとあり て用ゐ耕雲(カウウン)なもめけたどーま
て此ゐすり
さはいてとゐつく　あにまろえまして如もな
ゐ　ぎとい云つまどとけ高此ゐとのべる所をさて
さはいへど手り
けんのけさたに　けんのうさまありと云つるをもう
ゐたこ拾ひず娶垂拾てりけ此のうびひろ
弁をもつてとゐ不きとこ高此ゐをあるぬさまに
用ゐるる仲勢拾弥ずず此高をの例こ
おいさりくと　仮状をるをさりくいさてあると定

まれくのはるる　たまさうのはる所もありひ
あるさ所ゐすり
苔ゐ云　未此いりとこ
大まのきん　家の沒ようけり
まるる此家　数とそも沒ひ出あへきとを地
ぬぐろ海ゐ所のこで海のへるは数の沒とふ
いざといそまりと云所ゐを
うさ沒を　苔ゐ云此高地ゐ此沒いあ不ゐすさ
地と是ゐあ不ゐ此を此うきこるとゐ地
好さ沒も　む鬱の高此ゐ多此とようそへる此云
也ゐ好未とそる沒波ゐ仕せる地

うに事に　むなぐの事こと祝部ら云ところあ
祝部ら用ゐ
すてんれ留りて　ちひさのがりはいさもこと
はりしかいかんもこづまりてちひさく涙まよ
返也てむこ
胡の鳴れせの　ちさ後介のちさ海こ集縛戎
人弱のこにくおゆうり全篇とんへ
けん　むうこ
いちさいうめ　糸へへ也
の糸に昔、乳母のまきにんこ
秋のなかまに　三月ら三ちのがは

祝ら云ところて秋ふなる也面白
こ水るの　古人さまく也云る別勘ふを
あり玉篇ま及ぶ子開々雎鳩在河洲と云る
其面を得ら云あれからで今ら云べもあきす
ぎとこにまぐ所と云所こ
まつ若濤　水切ら石清水理法ひる
こうして　五帝さ行こ
親れこうり
うちつこて　たお武ら知こ
仰の中に　菩薩をれといふいくと云祝
あれと伝ぎこりの事ちれ

り場あり　絵部（エンギ）てみそう

吾国の　吾国といひぐ吾国の人々

まいりぐ霊験（レイゲン）あらたなる地蔵の義堂上人

の聖観安穏（セイテウアンヲン）為氏繁昌（シンジヤウ）と祈りをなしむる

為氏人なれども地蔵菩薩に可也

おそさにたちもとり　一條の意志にたりて

ありきんさ海を　三歳にてなるれの元毎の

はるとに笑しおりたるり

つて市　長谷寺あるりと人あり

このの人　為氏地蔵

弓矢もちる所　石具て所人

をんなはら　ぬぐれとぐさていろ歩

ひをまめくりの　いやき女也

あるあり　様（ツバ）市にく用させて

あるあり　別の人と所ぐさんと女地をて服立る

きに人くきあ　ゆうにいろちよ人くれきる

色もちりあり　色をを来むろ代

の形り為也

せしやうと　幕（マク）の数ついちり陰よれやうあれ

毛見ふそへて　投ふ帯を引人もろ者を

まいなるひよきれい　はふ上のはわりもんれく

しきまでいるよ　とるるされむろよ物盗

だてき行会は連しく系結せて
ものこと此人　月軍だてりにくいすくてる云
ものとありきも
無とうこと　無なかのもと此名こけ名光例あ
ま寒こなの無ア恐左とにくありきる附太郎
なるにつこて姓をこうへて若をといつう
ありえすこそ　く歌あるをけこ系不審り
ものひこなり
いわり　絡を絡く赤く染こりのこ
ものこそひ　右をこ系もこづきこも
あっありと　わづありこ

うへ　夕良上也
あくへはありすや　右をこ翔也お武出方を云り
あてき　無ア云こ
云此れと　夕良上のうをい答ざる也
こなあります　こ系こ翔
いこつく　夕良上をつまてあるへはをるれへ
なれこり　りこりに形ぶるけ上面り
ものこ云　云こ夕良上をいり
まくき　一瞬也
昔その物り　右をこり
いそや安そも　夕良上けせにまー後さぬるを云り

この介ども　　ゆきはの介と
なをにうつくしけ　　むすめこと
うつくしのひとへめく　　一ぜのひとへめくりのせ
ありねりぎぬをとりてのをとりけるりけと
和月の時分恵(チヤウ)するりのと
あるれるへ　　ちをいつくしは堂にまりてこと
けをを　　むすめこと
うや　　初恵と
けは法師は　　むすめは今日始て参りこと　ちをとまく
まりうりうりたは仏ふをたてるにつぐりをとりまへ
うるこの長者は長谷寺に宿老ひまふ宿とかまへ

て人をやどすこまこと深うるめとは今は此むすめの所
を宿をもあるうさはゆえは此けを宿を
西のまに立をりけるを
　　むすめの宿は市は方なれ
　　を立をう宿は仏ふ近とあり堂は東むさと
　　其はたの宿りあの宿は立をさとと
うくあやき　　ちをとりの羽と
けは国のと　　大ひかちと
大ひさに　　大悲菩と　観音也
三ふらを　　其恵量(キリヤウ)のあ　よりはいねびひるもうくあり
いとしくこそ　　ちをとりの羽と
中わ貴　　今の内ちをと

けうこも　今内侍のけむをめとしてあるむ舞
おぢさやうれ文たとれ書ふすり給へきすとと
あるう海　三条うの和
観世寺に　観音お四今よ東大寺西室宿れ也
つゝ人の　むうゝと
けあゝ文　歌文なるへゝ
さやうのへゝこそう　例文なれい大方紙ゐ書て去
ゐり云　むうゝの童ゐう
それへけたん　わとけたといふ寄物
きゝも云ゐり　つゝ人の実也
生涯大とこ　ほそ言ふあゝす

物ゑあうれ　ゐとう物ぐうゐり
屋れうへの　宗ふと
まゝおひいて　ゆゑ姫云
うやつま　むうゝをいう
文章　相撲さ
たうゝのけ毋法　落ちゐ院
云うゐゝひ　双ゝ宗ゝすとの給ひて源氏書ゐ
をゝれ寺あゝにの給也
いゝをとり　むゝ舞ハおとう給ふまゝきと
いゝきをゝるれうゝ　何後覚る先用ゝ
老人　おぢおとぐ

かとく　強い

うゐむさ　むゐうゐ

いそやまう　おをう翁

ありさま　家もなくありさまとおとろあ浦生

そのこゝかをもかあさりとも云

お武よ成てくづるとて源

氏物さ乱りきる

お武よなり給ふ

ふいとまごひよ系ふり給ふりしを入てなりされど其

時をえらびひよりとも

二月廿九　今日泊瀬ふまで行ゝびいるとして亀ぎさ

うれよせふも　行ゝるつくるみそ日さ泊るる川

うゐきせたもうゐ亀あふやと

泊瀬川　むゐ鬱のゐ養ゐそれゐのゐたゐてゐで合

亀めるゐ年れゐ亀てさい独ふもあまうゐう

いなゐひこらく　ゐちふおそゐくゐるやゐづのを

かめゐ泊なり

おゐくをう亀て　をゐおゐぐをありがゐくゐそを

毋ゐ云　夕ゐゐゐうゐまゐうゐざ海なるゐれけ和歌よ

ゐ生ふゐゐを生ゐよりかめてなふゐむ鬱をかめてを

つゐをゐふて　西養孤ふい人の独生長(ヨウセイチヤウ)生泊

おゐをにゐゐゐふゐ

みゐゐ人ゐ星ひにゐる　むゐうれあい皆ゐ

ゐびゐるなり

紙屋さうけづくり此坊のさまなり
人をみくるるん　よかるべきまゝにられ給ん
ときどきさうぶ法師めしくしたがへをなて
彩りくとひまの所なり
はるく　内侍の所なり
いりとても　寺うりもるゝてもあり所とたづひ
うり物をくへ玉とも
いひうるうき　六条と西条とをたらうき所なり
所をいかとものに　泊瀬より還向山なり
はるを　むろくのなり
みとひさいくるを　二条院は狭めなり自ら

つに六条院の庭の広く作られたるを
ひみくうり　むかしの事のみをひみくるを
たをめいれい
おくもはなてて　はかとりめする地
はなとのはかふく深のこれなる
所也　別よはなて　もるゝ　ぞ氏物語
らぞといふ所知て　よきる世を
こゝろる　河内方面
布仙花が忘草　若反と忘せり　古忘こまぐる地
味ぐ一所に分明なる所
まてくみあり　七条寺に云る系竜頭九七対
長なる人

まさこ人はきてを　　はしねてこそうはまこ氏はかた
うてこんあしは
はたとのあつ　　はまこのはかた也
あをこんたをしハ　　宣の花八こ
うの人を　　むうこと
ねはとをこうこて　　源氏はさすりをとをはかた也
さりやこれ　　さすこんくのこと
をこあること　　源氏こうれのはかたをはまこ氏は
をとものうぐとはかうこてきこと也
はうまきこと　　はまこの和源のはこ一向よさあ
はまぐはこんこのはこ

氏勇出そうきん　　源の和こうこれること
あるこうるや　　たをこう和
けよあうれ　　源氏和
よこんこんはこあ　　源の和こはまここ世のうい
ねはよまきこあ
うへあるこうこ　　はまこ氏和
かるこうあこん　　源氏和
こよあうこそ　　たをこう和
あうのこや　　源の和こは君とはまこをいこう
むるこはこんこ源と称とこくあ
いこうはまこて　　たをこ和

たちうかに　家うしてあやぐりの行也
うくきそあて　源也
うつくいとうまつく　右をうち
いろうふかさりの　夕貝上のむすく歌行
初しの源氏と右をうすてうちてて
いろうもうこちあす　源氏物
うくてつくうかつく　人のあまさあるゆに
夕貝上の人いなさと也
ほうぶもさとうつうつ　もとの雪未摘の歌
はせうそこ　右源流よ逆ひとうんとそんむ
うつ氏は方へ清見を行也

あの未摘　朱　第五地紙　てうきうまつむけす
みこうは行へ所と
はまあやうに　右重の歌めをて書ある所
たうしたとも　そのうしい初を行うすると源乃
をちづいうゆまずきうと也　みてういをちづといんん
うあと所の草也
うつうまてて　右をと
上ふかうひ　第二て書むをあ玉うる也
とりをを行也
はくつけうの　右にあるみあり衣服をたて
むうをつうさどうのと

さうしこん　むかつくこと
うこと　すつくひらから常れうぐ〜ろうぐぐ〜
かをつ敷ふも　源の会はよりをつくひらかの
をこなせ有る地
こうくふ　其為安稔（アンジン）りぐひまり海さいは
弁ち親子の居こうこ有まりきこと地先源り
但せ有り給へこと
するの地　知つきは様の寄こうきこ淤泥（ヲデイ）
也義ふよ拙ぐてありすよこ地
まいけるたちて　多拙い也驚をこれら
笠者みとこうこりふよこりぐ海ろる

をたをを多拙いこれる地
南のまち　ふとれは方
きをせこに　顕證（ケンショウ）あるいたる
さうる如人の　中家れは方い仕ふ（きこ方の
れど学文仕人のつくに人のこつ（学）
あひすみも　と義書とおたもよろ人こと地
ふれるこ者　夕島これるを兵今猪り給地
ゆくれこり　ふこの拙ての給地
こりすや　源れ知
人のこて　者為のこふあ源るるれど人
れこふこの給ふ

ゝくあゆを　そのゆをもらひあゆをもらひなり
略して以後之分の道ふまぐひしらん事なと
そのつゝさるまきさ　海分（ガイフン）よりを乗
あられとのゝるに　あまくれ中に夕貝の
上のやうなるあてなり
ふのまち　ゆゝとゝ
ぢりともあり　ゆふとゝの羽生ともゆゝとゝと
をけちぐくとひ
みゝりそゝと
ゆゝぐくとひ　ひ鳥の毋となれい源乃
すゝくしくも　ゝゝりと見ひまの
早逆ふい成ぐゝきゝ

ふりにまとひ　俗よゝ海ゝ行ふよゝ
その人氏　むゝ鷺の旋性（クヤウ）とい那（アラ）ゝぐ毋ゝ
十月　一年十二月とあり何ゝ不義
ひんゝ此方　花毋墨ゝ
表ゝ　海氏羽
如ゝ有ゝまて
ゆゆ　夕雪ゝ
雪ゝゆゝ氏ゝ　ゝゝ毋鷺九二方氏
けゝゝる人の　ゝ毋毋墨の羽
の親ゝ有ゝ　海氏羽夕貝ゝ
ゆゝ　花毋墨をさゝてのゝ

つきづき　　とぶ鳥墨の紙
源乃ゆかれんくのさま
むらむらのつきくのんこお
とみとなりて
書かるべき紙
源の令釈（ニヤウ）よくの紙
灯のもと　灯といとず
してうきる筆法奇特
是も忘れやくにの紙平面
源の朝臣

あるべきす　　三位殿の歳の時うり弁のうにてうり給
也　鏡仏合る毎答ごとせよ歳あの事此紙
りての紙也
源の朝臣
けいくをもるくくこひあ
ものとあり紙り紙也
ゆらの紙
ひあとをもるやうにてをき
てんにをもるくきれを書れり宝あ
ものとあり紙
源
すりのきよ也

恋沒り　男とい源氏の方へ文をとれば
恋まさる男いおるの　我方也いうなるすちと
無むろ〜い縁のあやう〜るあひ元志の
ある〜きるり
けふかう　源の濃くいあやさめよとはうと乃
とい給ふ
人々なる　女房の返事共方へ寄りての知
るるいるま　女房いきの重の兄弟とゆひの
名所つ〜り　さて後外国まて吾分の限つ
して返事をあめ〜り事も共今はなるをみ
恋限りもるく〜わるいびるるにくるるとと

あやけるかう　女房形とたり
今そこ事も　あふたあるのの方に数行ふ
づきれりもこ吾をにく行るる
盗ういさけ　大実盗るる
このすけもりめ　さて後外も家日よ濃
いそかりふくも　けかなとうりそあふも
けふ廣中一の出入をぐ元を家日にあてをや
ゆく出して結ひ人をさぐ所と
てうるる　湯殿るるあでかるうひてて
ゆ〜るる　ゆ〜このうりもそそ吾りて行る
るくふうやうにおまや　ひふと人戸行る

世ふなれ色あひ　はるとあるべき方へさしひきて
うちとけより　梅門よ今いまるあを青い手
をるべきものうの事をする布をいとり
はるそのひ　清の字みと接へ
いろれをとり——
さ結ん人の　人をの所紙をたかんるおくの語
さそいるまをと　梅ハはるといづまをきはるへつまそと
うれもかこしそ
青分も接みどにて見ハ
だりふくハをりかくれるを是と添よとうひ
結をとを結るの美いをうを異あるう
ふれはまう　はるのはるめ也

梅のかうをに　梅色ハ面てはよ也
ハ弱り　紅　大原ようる見也
ふれはりれ　黄蘗墨之
夜のはる　うはぎ也
くりれく　むうるる
にのこい
見れ　さそい実字の内大原ふうくはる
ふとあがす
りの色ハ弱りあり　むぶへのハ結梅みしら
とはをの見ハをとあがくそくのはる也
そこひあはれとそのをつむ　はるうり

奇特なる事ざんす

こきり　はつ河紙あやまり

ゆゝ色　落行とは用ゐ行事

かさゝぎの花紙てゝ

ゆゝ日　皆元日の仕料

けふとの仰せてみ給ふ

きこえあをとりの

山吹のうちき　使の孫

いそや給ふ　みれ羽

きてこれい

あゝりける　奥字とは

はくきあ　きれハ　はゝ孫あまり比奥なれば

源の氏元色もあ　れば氏使ひ　まりもる

はゝらふ　未稿の返　よゝめをさゝ

らはゝとの給ふ

たゝきまみ　源氏のまみ

うゝ夜　未稿いゝ衣とゝ　多く後行

家ゝてつのぞに　よむ

まゝも　源のふもけ

海とゝなれめこ　永人舎合の時必ま

とゝてなどゝ　ぞとゝ

のこゝ　分とゝ　中あり未

あさ人　きさらづたらすあぐんと云
事と必よむ也河流いあぐんのとあり紙ハ
あぐびとのとそハ文字ハ五文字也三字也
やまあ　中のみ文字也
よろ川乃さし　高松といふ所の名とあつ
る草子也毎度あるこ家りつぐ所計
用ひたり也
ひとちのみこ乃　蓮生法師の文
みよとて　添へ書せる也
よくあるい紙ハ毎
ゆたかなる也　ゆうのと結ぶひ偽

いとまめやかふて　けふこの実よの結ぶ
姫云りも　あぐさむあてのものの也
とをうきをれとー
すてあい　をーへのさまぬ也
ちれをちを　みちをそんとせびてー無紙なる
はりるい　うー物紙をして書籍の巻ー
結ぶつまるとこひ結ぶさる
をーうー結ぶ　文の巻さすよ歌ハある
ちはをーうー巻ー　ものあ毎つきものうき巻
ーなりてん紙をあとー　かざんとある和面白

みさけをそめ　くまなくふとこのかたよりつけてこ
ゑさんと　ゐてりなりてんとあれをこれいあの
衣よとりなりてよめ所務之源の吉方此回
るもるきふいてりとり

初音　永正十一年七月十二日

源氏六条院の正月景色
思ふ　花
年たちかへる
春立ちかへる年の春
正月一日より始まる
ある物の元日より始まる
数ふるぬ　六条院をふるてんとて
公界をふる
まいていとく　六条院へ年生さうあるに
まいて年始ふ　鶯籠をもて参り
まいでも引渡ふ　ふりひてかんあるこ

まことのおとこ　二位殿より書かせ給へる　奉書

よ　まことの道の御教の様式にて数多くぬ

ぬ　ひとりの門徒をもつてをしへたまふ

まことのおとこの正業出世まことに世にこと

かなてんへ

いけるほとけ　河生佛

さてさてようようもをて　おのの翁よりうえん

しく書かせ給へる射ていへるとび張紙

をもつぼをもて今中基をする乱面計り

ざるまをうるあくうをかくて消ることも可言

さ消えんかやうよりくびやうかうとてえ

人のまことの法をもつて成ぜすくすく

法をすすめ給へ

北条　四年のひめ　四年よりあらびに今年の年中に死

そ法　そ法　そ法　そ法　そ法

いとまをうるかる

人くもつてあるく道をしてをうべきの

ものうを掛てうるる源の仁恵ある義

中物の名　源のさうのぞうを

物ひの河出をうへうへ法作の人に源子のうち

物人や　源のいうけ物

かなしてそこゆる　光　私の称ちくさる事そ
をこうしたくとも
さんさ　河　糸桜　花数咲るなどと物
として　ひるくこるくめらさ
きさらの人くの　御国ひろる
とよるこ君こせ　岩よくへ　深ゆ
ひるのくこれくへ　出る花さ　身よ　出来
まくさいこせら　るへ　身と
菜花地錦　源と岩
落氷　源と岩と　彩る　べんと
宣めてこ　花　身よ

うるまるこ　岩よ　乃　西　の　六　事　流　ん
祈こ　高　大　よ　面　白　の
ひるのよ　ほ　そ　る
よとの　ひ　あ　こ　い　を　り　へ　つ　こ
きふこ　の　日
文粹　弁　九　庵　侵　雲　林　院　不　勝　感　歎　御　叙
亜　観　手　掌　角　故　老　曰　上　陽　の　日　野　遊　歌
冤　亡　事　如　何　停　松　樹　以　摩　腰
習　風　霜　之　難　犯　也　和　菜　羹　而　啜　台　朝　氣　味
之　克　調　也
平　城　天　皇　大　同　三　年　正　月　戊　子　朔　宴　賜
類　聚　国　史　七十二

五位以上衣被庚子曲宴賜侍臣衣被
文粹九早春觀賜宴官人同賦催粧應製菅
聖主命小臣分類史之次見有上月子日
賜菜羹之宴野中芝草世事推之蕙
心釣下和羹信人屬之蕙指
ゆかしく　ゆかしとは　ゆかしや
えもいはぬえん
河　指迷の指のよりは當りの色をしら物の
ゆかしきいつへうもえんの紙にて書
物よ當り物のの縁ゆきしらく
ふるかんん　折よりはひしろ紙ゆきるき

もんゆつきてんとうまう
年月を　紙の色はしろ
そこはの年よりは紙ゆきるの人紙出ありて
せめて紙ゆきるの物ゆきるの紙もゆくゆきと
物ゆきゆるの人ゆきの人ゆきと紙歴の義と
紙ゆきの紙歴の義ゆきるの
ゆきいつも　今日ゆきの日ゆきの日ゆきるきゆきと
もゆきの人ゆ月ゆきの日ゆきるきゆきと
ゆきつゆおゆきゆきの人ゆきゆ
ゆゆゆゆゆゆ　ゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆ　ゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆ　ゆゆゆゆゆゆ

そのあとへ
引かう様　しやその振さしいとゞまねとん
おさなさに流行ふさしせうとくりくそ
花ある姿や　拝して尊やこのと云ものゝこと
ちりぢりまうくるけふのしきさ余情と
今ちとし源氏とみ給つまでの〳〵し
夜の雨経ぬ　花散里
時ある夜　夜乃まちあす様さへ
まさとこの世のよ勇　うまさましさめぎとか
花散ら
あだからよちつやうある　一宿ものし

振ちぬとや　源氏て花散里は
もうそう出られ給へは　其ぞ客人之源の
ふりちぬうちむさて
しなふ縁をおもひるゝ未ぶりのまうさか
花散里
花田さて　きぬくぢらの河見んと見ら花
よ拝や
気さし常うる心　かぶよあるへさるよ
てうとあるまゝとちぢとかやうり
てはうひ振へしと源の君振之
気あうらきこん　源のん中たまる花散里は

容顔(ヨウガン)美麗(ビレイ)成処にて女ハ死ぬとさまことも
それのかゝりしたちの縁にあらずしてまつく
ちひ給く
浅からぬおりさ　死数悪の浅え給ふす
よ後まそも根こ給浅定色もあす先之
嫁る年の浅地縁　年月の浅地縁之
色の對　むかつこの事之
あさいさくも　去年十一月より経給程
よいすまぐこゐくしかる人と縁より経
あし給ふと彩ら
さりしこも　人がらも宜給之

山吹よ　歓くだらのふす苑よ輝之
初ちひよ　田舎より居給ひしらす之
うてかへさらすり　また初よりしてもかへ
こ死よ彩ら
さするゑん　ゆらくくとかうつきゐる
桜彩ら
くいと逢うてすく　然二ありし縁のことと
出家もおゝまさまことともむ勢乃ふり
かゝる所(カ)や縁のむ勢あそしきいゑ乃浅
その逢ふよ志給へともまいゑの文りよく
ゑくきさゆへよ逢ふてもすまことても

[illegible]との新[illegible]をなしそりてあるこうとこ
年ばかりあるらあるる　　こしら原の頃や
去年ばかり[illegible]　　[illegible]
はこ[illegible]　　今こうはこ[illegible]こも去ばひて去
上ばかりまとへも[illegible]あまとや
いつをかきこうること　　ばかり姫こも
う[illegible]こ　　去上ばかり事こ
の[illegible]ん　　むかつこの頃や
さもあるらそこう　　まこの地こ去上ば
こし[illegible]こ　　[illegible]
こうるまて書きる　　[illegible]

ちこ[illegible]こ歌の　　ばかりこ新うどく
去こ[illegible]ばかりこ
かこのこ[illegible]こ　　[illegible]
ここ[illegible]こ　　[illegible]
[illegible]や　　[illegible]
去ひこ　　去ひこ[illegible]
ここ[illegible]こ　　去こ[illegible]
[illegible]こ書や
ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]　　姫[illegible]
[illegible]や　　姫[illegible]

をりゝ

花の枝ゝ

花の枝

今日姫君の御迎ひのある

花のある巣

をゝやとづる雲の花の海ゝあり形

とゝの雲の水鳥

ゝ色相出てゝる

朱雀

さきをる巣へよ

花并の海ちゝゝゝ

ゝるの花よりもゝゝゝもあゝゝどとゝゝん

をとゝる

ひさゝへ

よるゝ地

雀さゝゝゝゝ

花

ゝるまいて

ゝ花ゝゝ

ゝ花

形形ゝゝゝ形ゝ

ゝ人ゝ月ざゝゝ

くゝゝゝゝ

ゝゝゝ

ゝゝ新深ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あまさとて源の世世の物語
きゝふるまんしとさやくゝ乃　はる雨無常に
死りみくゝあらむ死なん可や
物もうくしう　思ふ乃緣(エニギ)を海ぐさ
うゝ物ゝ
ろくをとよまる
鶴(ツル)時(ジ)宿(キヤウ)よりて孫(マゴ)をど
なる死をもとよまる乃と源ふる物ら
なるとゝひ物る　源より物ふる人なる死
いうゝく　死より蝉
物乃数なるへ乃ゝとよまと
ひ流よ海いる　源の流れなる人なる萩裏葉

よゝうゝ乃ゝくゝ
おくゝと云条流とふ物ら
流乃年ゝうゝもゝとまる　今源のむ
繁をえ物ていふ物る舞(ムヒ)なるを物る
と物ゝたゝまゝ
死の毒さゝふ
とゝう云毒ゝ　梅づ毒
梅とふ物ゝる流ゝ物ゝと云て毒ゝ毒よ
乃役よゝぐゝ　ゝゝと云も梅といへゝ
あのゝゝへ　死
このゝ乃　催る系

おもてに　　はるかなるこのみちをゆくよそにやすらへ
ちりそめの中の　　はるかなる佛ぶつの書
えだ葉の沢まくくちくちとかれて生る書くは
殿の中よりあらはれ　　ぶつよりそのあらはれ
蓮の中より劫を経るよりこれ不思議なるべし
三不思議とは三よりは不思議佛ぶつよりは法を
ちぶぐこそよい佛を供養せどとくらく
まくてひんぐの流　　三ぶりの書　朱摘室
はなをとれば
はなる死人　　佛や
おこるべ　　色物語

きりぐ　変見法
人間のうるる
月のかぶり計を常よりはる
滝のよとき　　古今のうた滝のみふう
ことかとこと云ふ紙にて髪よりぬとして
ふるさ都をしとのへるとも髪を滝
よりあとへうるる
御ちをにこう　　あのくぐらの河ぶ
ぶのよる御ちる紙をせはるる
きるはへる人うう
くるさうひ御ち　　はこえるる

ちとえんげめて　　朱摘室
朱摘ちぐうるる　　ぶつ人
月のかぶり計を常よりはる
滝のよとき　　古今のうた滝のみふう
ことかとこと云ふ紙にて髪よりぬとして
ふるさ都をしとのへるとも髪を滝
よりあとへうるる
御ちをにこう　　あのくぐらの河ぶ
ぶのよる御ちる紙をせはるる
きるはへる人うう
くるさうひ御ち　　はこえるる

かさゝぎのうらさきといひしにあかし
うけかよ思ふ之
清心よもはつれ　源乃清正之
清水千引清くみひ　苑
今ちうくめかと㮈　とにもうくゆ色源氏
教こ給ぢらいれるがあゆましまするとや
氣さにしうなし清心をてめ給へる　源の仁
然ある私之
清そとも　源乃同給之
うへさぬいとうし　源の知之
あへまん　お当国せんとえ

梅このいくからたる紀　秋もまさとえ
そのゆうきんと　自らつゆもあと
とや
むらいの流　二条院之東流もちむらひと
いへのま
梅るのの　今細く任給はぬ歎之苑は紅梅
まらドんいき常縁君乃心あのま
佛まらのまよ　心あけ任井乃さ海之
神にいのま　数くいの時京清まてのおた
かさゝぎてとから
松うらしま浦　まにさく引方

苔むす　源の河べ

うゑおきし　皇恩の河べや

あさくいかるべし　源氏あさくいかるべし

いとせあるべし

源の河べ中河の流れ

清きよおもしろく

つまいなしいろうるはしく　皇恩の山中に行く幸か

今を折しく佛の懺悔　行くを折しく

よもうたひ知るもうたひや

この河さまをうつまし　皇恩の山中や

紀伊国うらあくよいひ　紀伊国よ居よ

を源乃さうあてのおきとうたへ

かくもうるる　常陸国おもあまき程の用を

もあまきうとうるる

うとまるる　人くはあるまきうさ

ひろあれ　引の

いつまをもあくよ　源乃接ぬ

あるとおぼ　源をとて天下を掌

よへおへとをいるる人くをも接ぬ

をあるまかうれとうる

男踏歌　新撰式部文抄よあり貞和紀

接続天皇をく・河海引屋いをう張を

あり滿年よある事歟ば今年を男

踏歌うた　むかつこと

あの男のひめこと　ゆかの姫こそや

うるさくの　　中文をうぶ仕様ら出ら

こりもまや

其二人役ちあつまつて　あつまつく乱れ躍

よ撫でとる　こと　蔦躍と　俳躍とい同ぢや

人の級と食物と　ゆるれ　くらるよも

わらを　朝　ど　ぞ　躍　こ　人の　老　よ

とやうと云ひ　踏歌　とうく

あをいろの　　うるゆ　をとうあ　仕の中

よあら麹塵の　袍や

ちうさと　裝や

殿の中の　　夕男や

内大臣　　御　本　と　山二人　歌　頭

竹河　　うたふ　袍

かよまつる　　舞や

ぞよもうと　　色を　金　もうきがうと

うたう　　花　刺　動　ゆら　　牡　云　ぶ　ま　ま　　男

ちよとうとる　　る　と　牡　云　鳥　慣　ぞ　ま　と　る　て

弁少将　　紀　　紀　橋　天　長　と　色　紙　人　と　男　を

　　ぬめての　　と

いあ　へ　の　　延　長　天　麿　と　時　代　と　ゆ　め　と

て此書や　夕暮へ
中納言　人々笑ひ計りにて
とて去りぬ　人々笑ひ計りにて
ぬるのとて花お菓子どもとて
ちらしの　踏歌の後宴より模して源
此のおもて
人々これをよ　此ものゝ始りにて
おひめとて　笑ひ
ゆるしの　笑ひ
えもり　笑ひ
ゆるへ　女楽の夏花の
ゆるへ　女楽の夏花の

ゆるへ　女楽の夏花の
ちらしの事　あらと
とて　花片
花の　女楽の事
ちらし　女楽の
ちらし書　花の
ちらし書　花の
ちらし書　花の

明月子晉卷庚辰